

[症例・事例・調査報告]

卒業前看護技術トレーニング 2年目の取り組み

阿部 明美¹⁾, 目黒 優子¹⁾, 志田久美子²⁾, 荒木 玲子³⁾

キーワード：看護技術，卒業前，自主トレーニング，看護実践能力

Pre-graduation Nursing Skills Training : Second Year Outcomes

Akemi Abe¹⁾, Yuuko Meguro¹⁾, Kumiko Shida²⁾, Reiko Araki³⁾

Abstract

A total of 70 nursing students took part in a voluntary postgraduate clinical nursing program at a local university. The participants received training in venous blood sampling, intravenous drip preparation, infusion pump operation, temporary urethral catheterization and oronasal suction. An anonymous questionnaire completed by students after the training showed that participants were generally satisfied with the tasks they performed. In addition, the training provided them with an opportunity to reaffirm areas of insufficient skills and knowledge. The results from this program are very similar to the research done a year earlier and therefore may indicate that the research is still highly relevant.

Keywords : nursing skills, pre-graduation, voluntary training, nursing abilities

要旨

昨年に引き続き2度目となる、卒業直前の看護学生4年生を対象に、卒業後の臨床での看護実践に備え、就職後すぐに必要とする看護技術の自主的なトレーニングを実施した。参加学生は70名で、①静脈血採血、②点滴準備・輸液ポンプの操作、③一時的導尿、④口鼻腔内吸引を実施した。トレーニング終了後、参加学生を対象に無記名によるアンケート調査を実施。その結果、体験技術を概ね実施できたと評価し、また、自身の技術や知識の不十分さを再確認する機会となり、そのことが学生自身の今後の課題認識へつながっていたことが確認され、これは、昨年度の結果とほぼ同様であった。このことか

ら、昨年同様、本取り組みが有効であったことが示唆された。

I はじめに

2009年7月「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部を改正する法律」が成立し、2010年4月から医療機関等における新人看護職員の研修が努力義務化された。一方、看護教育課程においては、看護実践能力の強化に向け、2008年保健師助産師看護師学校養成所指定規則が一部改正され、多くの看護系学校は、2009年度入学生から看護実践能力の修得を目指した看護の統合・発展科目を取り入れた新カリキュラ

1) 新潟医療福祉大学健康科学部看護学科 2) つくば国際大学医療保健学部看護学科
3) 人間総合科学大学保健医療学部看護学科

[連絡先] 阿部 明美 新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科
〒951-3198 新潟市北区島見町1398番地
TEL・FAX : 025-257-4612
E-mail : a-abe@nuhw.ac.jp

ムを試行している。本トレーニングは、この新カリキュラム試行前の入学生において、正規の教科目外での学生の自主的参加による卒業後の看護実践に備えるトレーニングとして企画され、今回2回目（H22年度）を迎えた。トレーニング概要と学生へのアンケート結果を中心に、1回目（H21年度）の結果との比較を交え報告する。

Ⅱ 卒業前看護技術トレーニングの概要

1 トレーニングの目的

卒業直前にある4年次学生が卒業後の就職先での実践に備えるために、就職後すぐに必要とする看護技術について、自主的にトレーニングすることを目的とした。

2 対象

看護学科4年生81名に事前調査を実施し、70名（H22年秋の卒業生1名を含む）がトレーニングに参加した。

3 日程と内容

トレーニング実施に向け、看護学科4年生81名に対し、①トレーニングへの参加希望、②希望実施時期、③希望実施技術項目について事前調査を実施し、58名から回答を得た。その結果、実施日は平成23年3月3日・4日（学生は両日のどちらかに参加）、実施技術項目は「静脈血採血」「点滴準備・輸液ポンプの操作」「一時的導尿」「口鼻腔内吸引」とした。

4 トレーニングの指導体制

本トレーニングは学生が自主的に実施するものであるが、安全への配慮および正しい看護技術の修得に向けて、看護系の教員が助言・指導にあたった。また、「静脈血採血」の実施は希望者において学生同士で実施することから、事故発生時に備え、当該大学の学校医に承認を得て、トレーニング当日は学校医に学内待機を依頼した。

5 実施方法

日程および実施技術項目を決定後、2日間の実施日に学生を分け、さらに6つのグループを編成（1グループ約6名）し、看護学実習室で実施した。また、「静脈血採血」の実際においては、学生同士で実施を行うことについて、事前に同意書へ署名し提出を求めた。

1) 準備・事前学習の実施

トレーニング参加にあたり、学生は準備および事前に自己学習に取り組むこととし、準備および事前学習を2/28、3/1に設定した。また、グループ内で各実施技術項目の技術担当者を決め、担当学生が中心に準備・実施項目の進行を行うこととした。学生は、事前学習日を活用し、教科書・参考文献の確認およびビデオ視聴を行うとともに、トレーニングの準備に取り組んだ。

2) トレーニング当日の進め方

両日ともに、グループごとに技術項目についてロー

テーションする方法で実施した（表1）。「静脈血採血」は、事前にシミュレーターで十分練習の上、指導教員確認のもと、学生同士（希望者）で実施した。

表1 タイムスケジュール

時 間	1 G	2 G	3 G	4 G	5 G	6 G
9:00～9:10 (10分)	オリエンテーション					
9:10～10:30 (80分)	点滴準備	導尿	気道内吸引			
10:30～10:40 (10分)	休憩					
10:40～12:00 (80分)	気道内吸引	点滴準備	導尿			
12:00～13:00 (60分)	昼食					
13:00～14:20 (80分)	導尿	気道内吸引	点滴準備			
14:20～14:30 (10分)	休憩					
14:30～16:00 (90分)	採血					
16:00～16:30 (30分)	振り返りとアンケート記入					
16:30～17:00 (30分)	後片づけ					

3) 実施後のアンケート調査

本トレーニングの評価を目的に、トレーニング終了後に参加学生に対しアンケート調査を実施した。アンケートは無記名とし、調査の目的、結果は公表することがあること、調査用紙の提出は自由意志によること等を口頭および書面で説明し、所定の場所に提出してもらった。

アンケートの内容は、実施看護技術項目の達成状況に関するもの7項目、事前学習やトレーニングへの取り組み状況に関するもの2項目、トレーニング全体への評価に関するもの2項目の計11項目について『1:まったくそうは思わない』～『4:非常にそう思う』の4段階評価法で回答を求めた。さらに、自己の看護技術についての今後の課題や本トレーニングに参加しての感想・意見について、自由記述による回答を求めた。

Ⅲ 自主トレーニング実施後のアンケート結果

アンケートの回収数は59名（回収率85.5%）であった。

1 実施看護技術の達成状況、取り組み状況および全体への評価

実施看護技術の達成状況および取り組み状況と全体への評価について、H21年度の結果とともに表2に示した。尚、H21年度は、「導尿」は行わず、「創傷処置」を実施したため、「項目1」はH22年度の「導尿」についての結果を示した。

H22年度での実施看護技術の達成状況について、『非常にそう思う』または『そう思う』と答えた人は、「1. 一時的導尿」が45名（76.3%）、「2. 口鼻腔吸引」53名（89.8%）、「3. 点滴の準備」43名（72.9%）、「4. 滴下

表2 卒業前看護技術自主トレーニング実施技術の達成状況および全体への評価

単位：人(%)

項 目			非常にそう 思う	そう思う	そう思わない	まったくそう は思わない
1. 一時的導尿を正しい方法で実施できた	H22年度	n = 59	4 (6.8)	41 (69.5)	9 (15.3)	5 (8.5)
	H21年度	n = 76	12 (15.8)	48 (63.2)	15 (19.7)	1 (1.3)
2. 口鼻腔吸引を正しい方法で実施できた	H22年度	n = 59	12 (20.3)	41 (69.5)	6 (10.2)	0
	H21年度	n = 76	14 (18.4)	44 (57.9)	17 (22.4)	1 (1.3)
3. 点滴の準備を正しい方法で実施できた	H22年度	n = 59	13 (22.0)	30 (50.8)	15 (25.4)	1 (1.7)
	H21年度	n = 76	23 (30.3)	45 (59.2)	7 (9.2)	1 (1.3)
4. 滴下調節を正しい方法で実施できた	H22年度	n = 59	20 (33.9)	27 (45.8)	7 (11.9)	5 (8.5)
	H21年度	n = 76	18 (23.7)	44 (57.9)	11 (14.5)	3 (3.9)
5. 輸液ポンプの操作を正しい方法で実施できた	H22年度	n = 59	20 (33.9)	22 (37.3)	11 (18.6)	6 (10.2)
	H21年度	n = 76	32 (42.1)	35 (46.1)	9 (11.8)	0
6. シミュレーターでの静脈血採血を正しい方法で実施できた	H22年度	n = 59	17 (28.8)	37 (62.7)	5 (8.5)	0
	H21年度	n = 76	25 (33.8)	32 (43.2)	13 (17.6)	4 (5.4)
7. 他学生の静脈血採血を正しい方法で実施できた(実施者のみ)	H22年度	n = 59	13 (22.0)	35 (59.3)	7 (11.9)	4 (6.8)
	H21年度	n = 76	7 (9.2)	33 (43.4)	34 (44.7)	2 (2.6)
8. トレーニング前に事前学習を十分行なった	H22年度	n = 59	5 (8.5)	30 (50.8)	23 (39.0)	1 (1.7)
	H21年度	n = 76	47 (61.8)	26 (34.2)	3 (3.9)	0
9. トレーニングに積極的に取り組んだ	H22年度	n = 59	22 (37.3)	32 (54.3)	5 (8.5)	0
	H21年度	n = 76	60 (78.9)	16 (21.1)	0	0
10. トレーニングで行ったことは、卒業後に役立つ	H22年度	n = 59	48 (81.4)	11 (18.6)	0	0
	H21年度	n = 76	69 (90.8)	7 (9.2)	0	0
11. トレーニングに参加してよかった	H22年度	n = 59	49 (83.1)	10 (16.9)	0	0

調節」47名(79.7%)、「5. 輸液ポンプの操作」42名(71.2%)、「6. シミュレーターでの静脈血採血」54名(91.5%)、「7. 他学生の静脈血採血」48名(81.3%)であった。70~90%の学生は各看護技術について概ね実施できたと評価していたが、「輸液ポンプの操作」や「点滴の準備」は、他の技術に比較すると、難易度がやや高い傾向にあった。

「8. トレーニング前の事前学習を十分行なった」では35名(59.3%)と事前学習においてはH21年度同様、やや自主性が乏しい傾向にあったが、「9. トレーニングに積極的に取り組んだ」では54名(91.6%)と、当日のトレーニングではほとんどの学生が積極的に取り組んでいた。自主トレーニング全体への参加については、「10. トレーニングで行ったことは卒業後に役立つ」が59名(100%)、「11. トレーニングに参加してよかった」が59名(100%)で、H21年度同様回答者すべての学生が概ね肯定的にとらえていた。

2 学生における今後の課題、感想・意見(自由記述結果)

1) 自己の看護技術についての今後の課題

今後の課題で記述数の最も多かったものは、『確実な無菌操作』(27記述)で、次いで『知識の補充、根拠の明確化』(24記述)、『技術(無菌操作を除く)を確実に修得』(12記述)、『落ち着いて、余裕を持って実施』(7記述)、『経験の蓄積』(6記述)等であった(表3)。学生が記述した今後の課題は、H21年度の内容ともほぼ同様の内容であった。

2) トレーニングに参加しての感想・意見

トレーニングに参加しての感想・意見として、最も記述が多かったのは『いい経験になった、やってよかった、今後の役に立つ』(26記述)で、次いで『知識・技術の再確認になった』(14記述)、『企画に対する意見・課題』(12記述)、『自身の未熟さを実感した』(11記述)、『今後の課題に気づけた』(10記述)、『技術を実施することへの緊張、不安』(8記述)、『人への採血が実施できてよかった』

表3 自己の看護技術についての今後の課題

確実な滅菌操作 (27記述)	清潔と不潔の手がどちらなのかを、いつも頭の中で考えながら技術を行う。 無菌操作が難しく、まだまだ技術が足りないと感じた。 清潔区域と汚染区域の区別をしっかりと持って実施できるようになりたい。 清潔と不潔をきちんと理解して行わなければならないことを痛感した。
知識の補充、根拠の明確化 (24記述)	どうしてそれを行わなければならないのか、裏づけ・理由をしっかりと理解して行いたい。 技術の方法だけでなく、目的や一つひとつの根拠、観察項目など、もっと理解する必要がある。 実施前に、どの手順でどこに物品をおいて実施するのか自分の中で確認してから行うことが大切。 尿道の長さや血管の走行など、解剖生理をしっかりと理解する。
確実な技術（無菌操作を除く）の修得 (12記述)	技術の向上や体位の工夫などが今後の課題。 患者さんに不安が伝わらないくらい熟練して適切な方法でケアを行えるようにしたい。 点滴準備がもっとスムーズに行えるようになりたい。 採血の基本事項をまずパーフェクトにしたい。
落ち着いて、余裕をもって実施 (7記述)	もたついたり、失敗したりしてしまった。 焦らない、あわてない、冷静に技術を行う。 緊張せずに行えるようになりたい。 手技で一杯いっぱいになってしまうので、余裕を持ってできるようになりたい。
経験の蓄積 (6記述)	これから多くの体験を積んで、臨床でもこのような技術を行えるようになりたい。 練習を多く積んで、経験知を増やしていく必要がある。 技術面に関しては、回数をこなさないと上手くならない。あとは、自分で努力するのみ。
十分なイメージづけ (3記述)	明確な全体の流れをしっかりと頭の中にイメージし、行えるようになりたい。 一連の動作をイメージして一つひとつの手順を確実にできるようにする。
患者へ適切な言葉かけ (3記述)	どの看護技術についても、患者への適切な説明や声かけ、労いの言葉がかけられるか不安である。 実施するのが精一杯で、患者さんのことが見えなくなるので、一番大切な患者さんの状態を確認しながら声かけをして実施できるようになる。
自信をつける (2記述)	実際は、対人間（患者さん）に行うので、自信をもってできるようにしていきたい。 人形で練習したが、実際は患者さん自身に自信をもってできるようにしたい。
その他 (5記述)	テキストの勉強と実際ではまったく違う。新人研修では、今回よりももっと積極的に行いたい。 今の状態では、やり方を知っているだけであって、実践で応用するのは難しいと思う。

た』(7記述)、『教員の指導があってよかった』(5記述)、『人に実施することの大切さ・責任を実感』(4記述)等であった。トレーニングへの感想・意見は、H21年度とほぼ同様の内容であった。

Ⅳ 考察

H21年度のトレーニング同様、体験技術は概ね実施できたと評価しており、また、自身の技術や知識の不十分さも再認識する機会ともなり、そのことが自身の今後の課題認識へとつながっていた。本トレーニングで実施した技術項目は、先行の調査結果¹⁾²⁾から、臨地実習中に学生が体験(実施・見学)する技術としては体験機会の少

ない技術であり、新人看護師が“専門知識”とともに“看護技術”は職務上の困難の程度が高いと感じている結果³⁾からも、就業直前の本トレーニングの実施は有効であったと考える。

さらに、実施後のアンケート結果から、本トレーニングは、学生が現時点での自身の現状を知り、採血での患者体験から患者の思いを見つめ直す機会ともなっており、人に技術を実施することでの責任の自覚や、今後の課題を見出すなど、専門職業人としての意識を高める機会となっていた。このことから本トレーニングの実施機会そのものが有意義であったと評価できる。また、アンケート結果では、教員の指導により安心して行えたと

の記述もあり、教員の指導のもと、本トレーニングを実施したこともトレーニングの効果につながったと考える。

一方、比較的達成状況の低かった「点滴準備」や「輸液ポンプの操作」は、平ら⁴⁾の調査結果とも一致するものであり、また、課題認識の高かった『無菌操作』についても、実習でほとんど経験することのない技術の一つとして、学生にとっては難易度の高いものとなっていた^{5,6)}。難易度の高い技術として、いかに限られた時間で効率よくしかも十分なトレーニングにしていけるか、学生のニーズ・状況を考慮しながらさらに検討し、企画していく必要がある。

V 結論

1回目同様、トレーニングでの実施看護技術は概ね実施できたと評価していた。また、トレーニングへの参加は、より確実な技術の修得や根拠となる知識獲得への動機づけとなっており、加えて、責任の自覚や就業への心構えにもつながるものとして有効であった。

VI おわりに

2010年から努力義務化された医療機関等における新人看護職員研修の動向と合わせて、看護基礎教育での臨床

実践能力の向上に向けた取り組みの一つとして、本トレーニングの実施についてもさらに検討を重ねていく必要がある。なお、本トレーニング報告の一部を、第11回新潟医療福祉学会学術集会にて発表した。

文献

- 1) 三輪木君子, 小島洋子, 今福恵子ら; 臨地実習における「看護技術の習得状況」の実態(1)―学生用技術ノートから―, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 19:13-25, 2005.
- 2) 東雅代, 村井嘉子, 大場みゆきら; 臨地実習における看護技術修得状況の実態(2009年報告), 石川看護雑誌, 8, 2011.
- 3) 唐澤由美子, 中村恵, 原田慶子ら; 就職後1ヶ月と3ヶ月に新人看護師が感じる職務上の困難と欲しい支援, 長野県看護大学紀要10:79-87, 2008.
- 4) 平むつ子; 卒業演習を経験した卒業3ヶ月後の新人看護師の注射技術の到達状況, 秋田大学医学部保健学科紀要15(2):71-76, 2007.
- 5) 前掲載1), 17.
- 6) 前掲載2), 15-17.

本研究論文の筆頭著者である阿部明美先生は、平成24年6月12日に急逝されました。新潟医療福祉大学看護学科の開設と同時に着任されてから7年目、体調不良を訴えて入院した直後の訃報でした。亡くなる直前まで研究や教育に心血を注いでおられ、論文の受理が6月4日ですから、本論文が阿部先生の遺稿となりました。

阿部明美先生のご冥福を心からお祈りいたします。

(新潟医療福祉大学健康科学部看護学科長 塚本 康子)

編集委員会注：本稿は、投稿者が投稿直後に急逝されたため、遺稿として、編集委員会の校正のみで掲載しました。